■ これまでの工事の経過

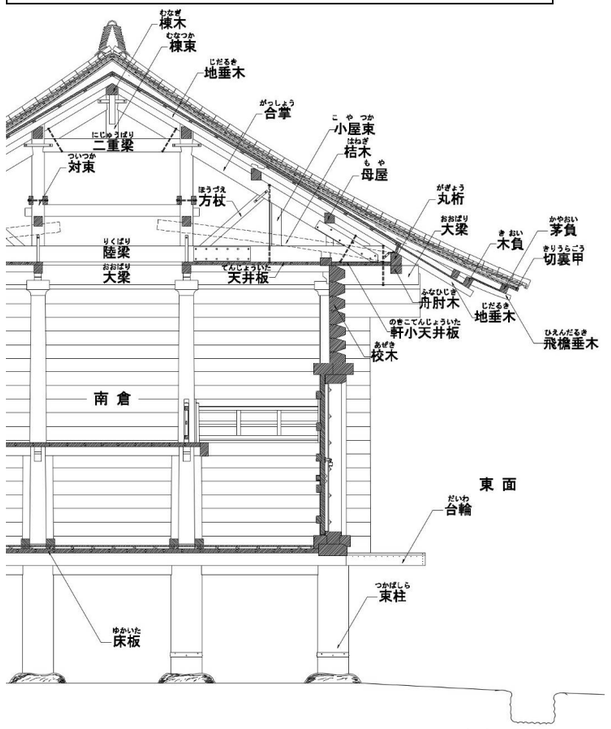
正倉を工事中の風雨から守り、作業の足場となる「素屋根」の建設が平成 23 年 10 月から始まりました。基礎コンクリートの打設、鉄骨の建て方を経て、翌 24 年 2 月下旬に完成しました。その後正倉本体の整備工事が開始され、正倉内にあった唐櫃の移納や陳列棚（ガラスケース）の解体作業を行い、5 月から 6 月にかけて瓦をおろしました。また、屋根の一部を開口し、現状の小屋組の納まりを確認しました。

現在は、おろした瓦や建物各所の調査を行っており、これから本格的に建物の補強工事を開始するところです。

＜これまでの工事の様子等は宮内庁 HP でもご覧いただけます。＞
http://www.kunaicho.go.jp/event/shososeibi/

工程表

- 平成23年 10月 **素屋根建設**
- 平成24年 3月 **第1回現場公開**
- 4月 **正倉本体の工事開始**
  - **屋根工事**
    - 瓦撤去、選別・清掃、土居葺一部撤去
    - 補足瓦製作開始
- 9月 **第2回現場公開**
  - **小屋組構造補強工事**
- 平成25年 6月 **屋根工事**
  - 土居葺復旧、瓦葺き
- 平成26年 1月 **内部復旧**
  - **正倉の工事終了**
- 4月 **素屋根解体、周辺復旧**
- 11月 **正倉外構公開再開（予定）**



南倉断面図

■ 工事概要

屋根　瓦は全て丁寧におろし、目視及び打音検査により再用・不再用の選別を行います。

補足瓦の形状は天平期の瓦に倣い製作します。瓦の葺き方は、再用古瓦を使用する屋根面については、湿式工法（土葺：土を敷く）、新しく製作した補足瓦のみを使用する屋根面については、乾式工法（空葺：土を敷かない）で葺く計画です（瓦の葺替　約36,000枚）。

土居葺は、小屋組補強に伴い野地板を解体する部分及び腐食破損部分について取り替えます。

小屋組　陸梁を鋼材で補強し、大梁を吊り上げることで丸桁が現状以上に垂下しないように補強する計画です。

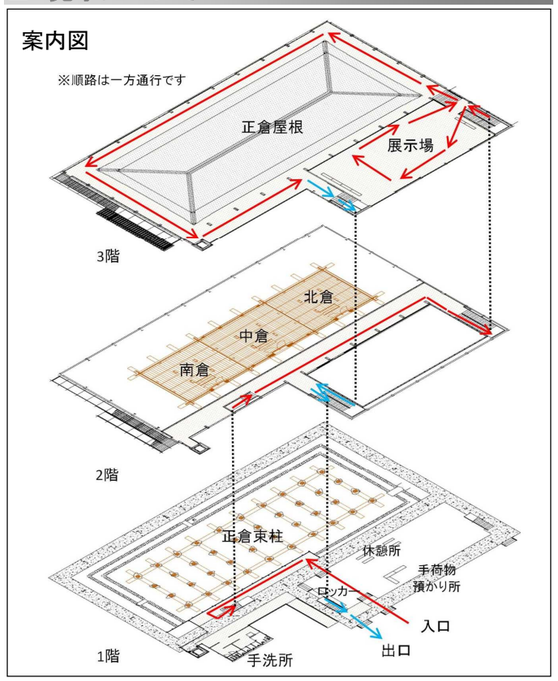
校木組　校木組に隙間のある部分は、間に埋木を施します。【正倉の大きさ：間口約 33m、奥行約 9.4m、床下約 2.7m、総高約 14 m】

素屋根　正倉を保護するために素屋根で全体を覆います。併せて一般の見学者の通路としても供用可能な作業デッキを設けます。鉄骨構造で鉄骨の使用重量は約360トン。大きさは約35m×約48m、高さ約 19mです。

※工事内容は調査により変更の可能性があります

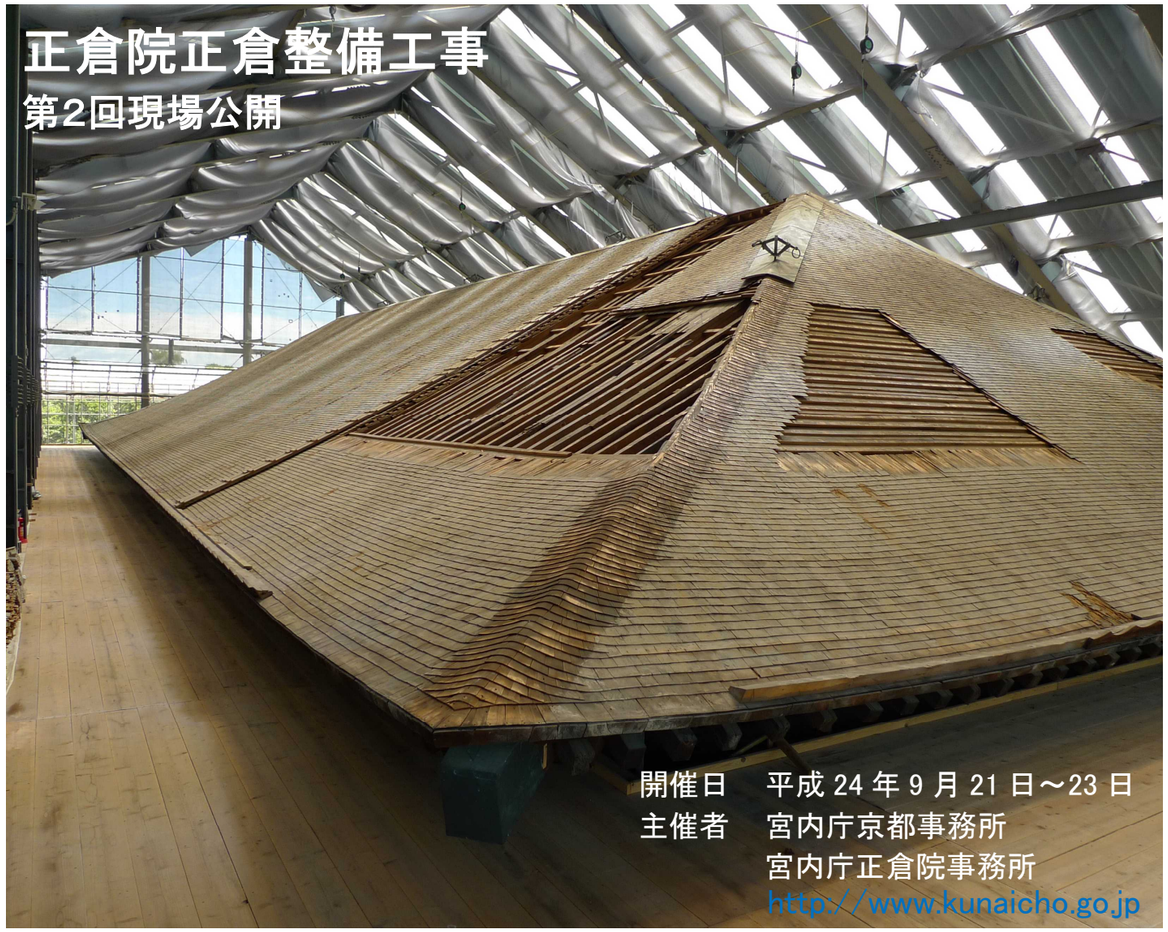
■ 見学について

案内図



守っていただきたいこと

- ■触らないで　正倉に触れるのはご遠慮ください。
- ■写真撮影　建造物や展示品は撮影できます。ただし三脚の使用はご遠慮ください。
- ■飲食・喫煙　敷地内での飲食・喫煙はご遠慮ください。1F 休憩所と3F 展示場に水飲み器をご用意していますので，決められた場所でご利用下さい。



正倉院正倉整備工事
第2回現場公開

開催日　平成 24 年 9 月 21 日～23 日
主催者　宮内庁京都事務所
宮内庁正倉院事務所
http://www.kunaicho.go.jp

■ 正倉とは

正倉院正倉は、奈良時代創建の東大寺の倉庫のうちの一つであり、北倉、中倉、南倉の三倉が集合する一棟三倉形式の建造物です。創建年代を直接示す記録はありませんが、ほぼ天平勝宝8歳（756）頃には成立していたと考えられます。天平勝宝8歳は聖武天皇が崩御された年で、その七七忌にあたる6月21日に光明皇后が聖武天皇のゆかりの品々を東大寺大仏に献納し、正倉院宝物の始まりとなりました。

北倉は聖武天皇御遺愛品が納まり、当初から開扉に勅許を要する倉、すなわち勅封倉でした。また、中倉も平安時代中頃までには勅封倉になっています。南倉のみは長らく僧綱（のち東大寺三綱）が管理する倉、すなわち綱封倉でしたが、明治8年（1875）に正倉および正倉院宝物が政府の管理下に置かれるに至り、三倉とも勅封倉となりました。

戦後、新しく近代的な宝庫が完成したことをうけて、正倉にあった宝物は、昭和35年（1960）までに、一部の唐櫃を除いて全て取り出されました。現在は、空調設備のある西宝庫（昭和37年竣工）、東宝庫（昭和28年竣工）が宝物の収納・保存の役割を担っています。その後、平成9年（1997）には国宝に指定され、さらに翌年には「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されています。

工事前外観

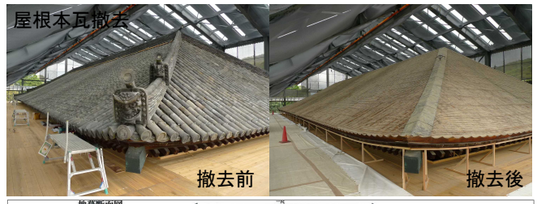
校木の断面

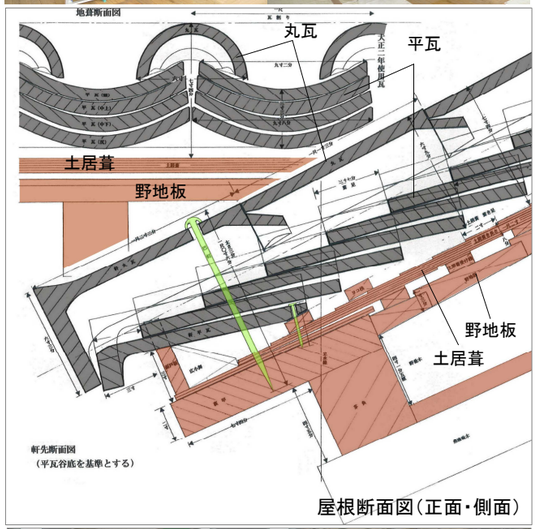
現在の北倉内部

正倉の屋根本瓦葺

正倉の屋根は平瓦と丸瓦を交互に並べる本瓦葺です。大正時代に全面解体修理が行われてから約 100 年が経過しており、経年による瓦のずれ、破損、瓦を固定する葺土の流出などが見られました。瓦の破損は、屋根下地への影響が懸念される状態でありましたが、大正の修理で雨漏り防止のため新たに設けられた土居葺が傷んでいる部分は多くないことが判りました。

正倉の屋根に葺かれていた瓦は、何度も行われた修理の歴史を物語るように、様々な特徴のものが混在していました。それらは寸法や細部の作り方が異なり、製造年や製作者を示す刻印や箆書き（へらがき）があるものも多く見られ、創建当初の天平時代から、鎌倉・室町・江戸・明治・大正そして現代に補足した瓦まで、いろいろな時代のものが含まれていました。



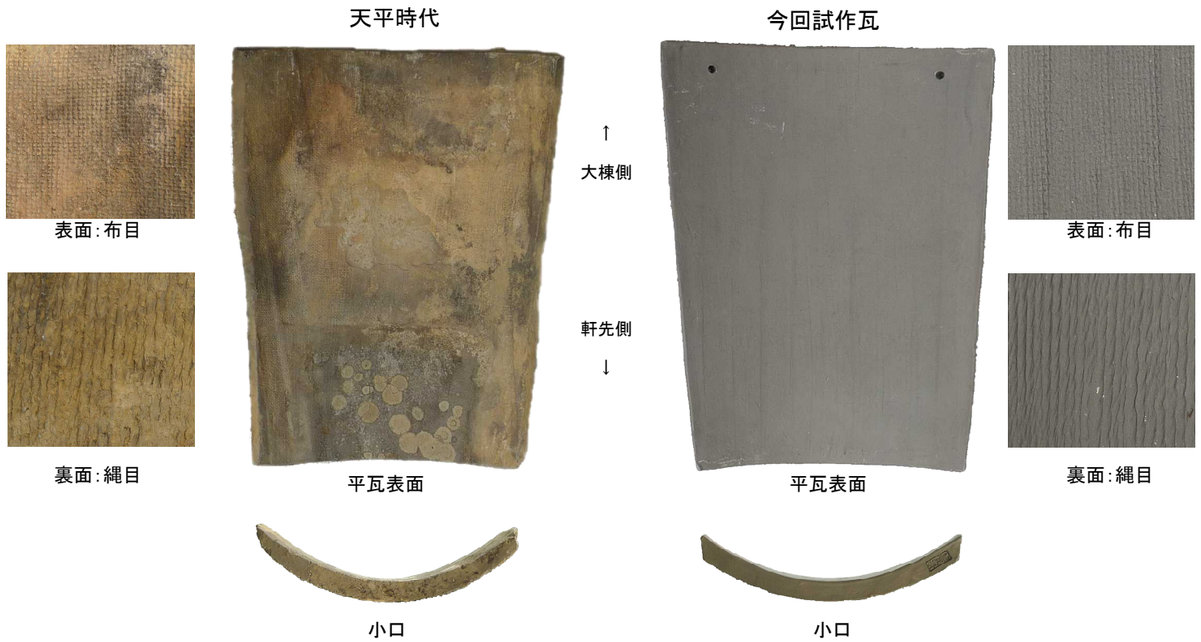


屋根断面図（正面・側面）

補足瓦の製作方法

正倉の屋根に各時代の瓦が葺かれていたということは、これまでの歴史において、修理の際に全て新しい瓦に変えるのではなく古い瓦を大事に再用してきた証です。今回の修理においても先人の想いを引き継ぎながら、再用できる瓦はできるかぎり屋根瓦として葺き直すことを最優先します。残念ながら割れて使えない瓦も多く、今回は半数以上を新たに製作することになります。

文化財修理の基本は、創建当時の姿を尊重し，新たな改変を極力避けるという考え方が一般的です。そこで、今回の修理の補足瓦は、正倉の創建頃と考えられる天平時代の瓦を参考に製作することにしています。因みに，大正時代に行われた正倉の修理においては、創建当初の瓦の復元を試みておりますが、それ以前の正倉の修理では，その時代時代の技法で瓦が製作されていました。



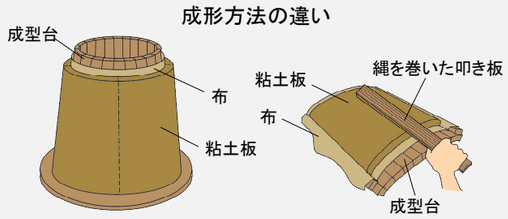
正倉の屋根に葺かれていた各時代に製作された瓦は、寸法（幅、高さ、厚み）、そり具合、側面の切り方、端部の面取り、表面の仕上げ方等にそれぞれ特徴があります。特に天平時代の平瓦は、瓦を成形する際につく木型や布目・縄目の跡が特徴として挙げられます。今回の修理で製作する補足瓦のうち平瓦と丸瓦については天平時代の瓦の寸法に倣い、表裏面には布目や縄目をつけることにしました。

また、新しく製作した瓦については、今回の修理で製作したことが後世の人にも判るように、修理年度を刻印します。

■ 古代の瓦の製作方法について ■

日本書紀によると 588 年に百済から瓦博士が渡来し、この時に日本に瓦の製作技術が伝来したとされ、時代の経過と共に瓦の製作方法は変わっていきます。正倉の創建頃は、平瓦の製作方法が「桶巻き作り」から「一枚作り」に変わった頃と言われています。

「桶巻き作り」平瓦は、円錐台形の成型台に粘土板を巻き付けて成形した粘土円筒を、4枚に縦割りにして作ります。それに対し「一枚作り」は、凸形の成型台の木型に一枚一枚粘土板をのせ成形するものです。いずれの方法においても成型台から粘土板をはがしやすいようにあらかじめ布を巻いておき、成形の際には縄を巻いた叩き板で叩きます。そのため表面に布目、裏面に縄目がつくのです。



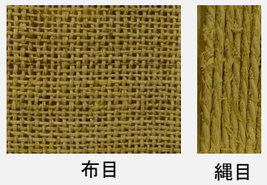
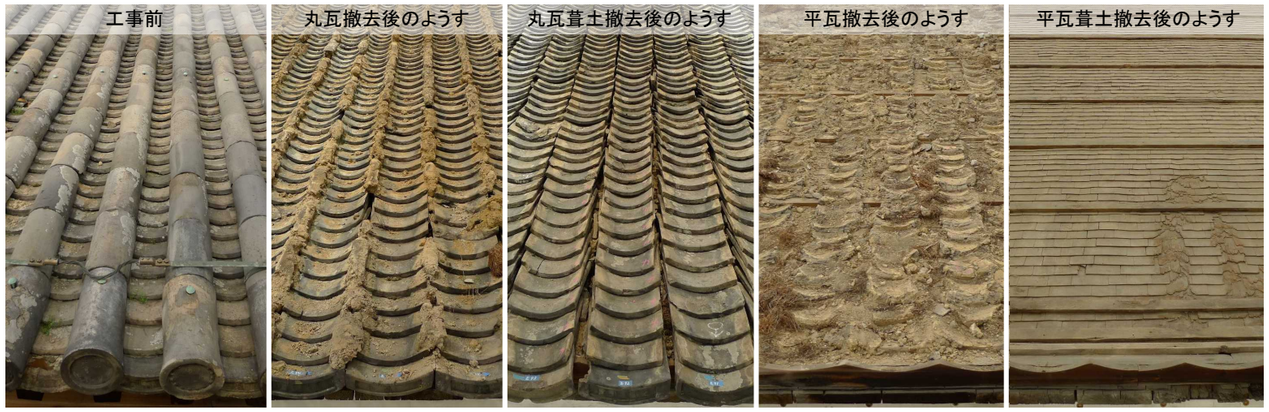



写真　今回試作瓦の製作で使用した布と叩き板の縄の拡大